ほうれんそう収穫機 SPH400 活用事例

株式会社エフワイアグリ
取締役
農事業本部長 兼 営業部長
各務 栄作 様

株式会社エフワイアグリの各務取締役。バッテリ・モータ駆動のほうれんそう収穫機は環境保全型農業にも貢献すると期待している。収穫後の調製用に、軟弱野菜調製機NC301も2台導入している(写真は本年導入した2台目)

機械化を前提とした大規模栽培システムを構築
省力化と高品質化への取組みで会社のさらなる拡大・発展を目指す

ハウス野菜の大規模生産・販売会社を一から立ち上げ

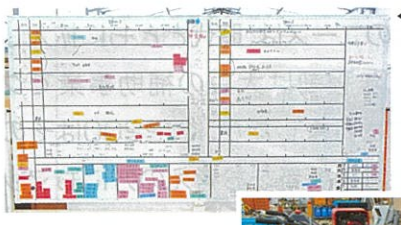
株式会社エフワイアグリは2017年設立、本格始動は2019年と若い組織ながら、現在、年間14回転させるベビーリーフ(ハウス120棟)を主軸に、年4回転させるほうれんそう(同20棟)、アスパラガス(同18棟)、露地レタス3haを加えた大規模経営を行っています。ベビーリーフ栽培では日本一とも言われる熊本県の株式会社果実堂の技術指導のもと、高品質・安定生産に努め、また同社との協業により生産物の販売先も順調に拡大しつつあるエフワイアグリ。将来的には地元福岡県豊前市のみならず、隣接する大分県中津市にも生産基盤を広げる予定で、ハウス300棟規模を目指しているといいます。

このように設立当初から大規模経営を志向し、計画的に事業展開を進めているエフワイアグリにとって、大面積であっても少人数で効率的に作業を行うための機械化は、必須とも言えるものでした。そうした機械化の一環であり、ハウスほうれんそう収穫の省力化、効率化に貢献しているのが、ほうれんそう収穫機SPH400です。

▲大型の保冷庫を併設するエフワイアグリの社屋。ハウスから保冷庫まで作物を運搬する保冷車も自社で備え、高品質の維持に努めている

機械導入による省力・省人化で社員が長く働きやすい環境をつくる

「会社組織ですから当然、機械導入にかかるコストと得られるメリットとの衡量は綿密に行っています」と言うのは、エフワイアグリ取締役で、農事業本部長兼営業部長を務める各務さん。「まず、作業人員が少なくて済むのが大きなメリットですね。ほうれんそうは多い時で1日250kg程収穫するのですが、これを手作業で行おうとすると、収穫に5名、収穫したほうれんそうの運搬に1名、計6名は必要になります。それに対してほうれんそう収穫機は、機械のオペレータ1名、運搬1名の2名で同様の作業ができます」と、実に3分の1の人員で同じ面積の収穫が可能であると言います。「さらに、手収穫は始終腰をかがめての作業で非常に辛い。一方、収穫機を使用すれば、作業中も直立した状態なので体が楽なんですね。会社として持続的な発展を目指す上で、働く人への負荷を減らすといった労働環境整備は重要です。そうした面も機械導入のメリットとして考慮しました」。先々を見据え、長く事業を継続していくためにも、機械導入の効果は大きいと話す各務さんです。



◀様々な作物を栽培し、常に作業が重なっている状態であるため、効率作業が行える機械が果たす役割は大きい

▶ほうれんそうの播種機は、収穫機の仕様に合わせ、条間15cm、8条播きのものを導入し、使用している

ほうれんそう収穫機の高い作業性が作物の高品質化にも貢献

また、ほうれんそう収穫機の作業性の高さ、作業速度の速さも魅力だという各務さん。「特に収穫期後半の5月、6月になると暑くなるので、手早く収穫しないと、しなびて品質が落ちてしまいます。その点、この収穫機は足が速いので、そのような時でも高い品質を保った状態で収穫できるんです」。また気温の高い時期に限らず、スピーディに、適期を逃さず収穫できることによって、エフワイアグリの顧客であるスーパー等が求める高品質、定量出荷といった条件にも、年間を通じて応えることができ、これが信頼の醸成にもつながっていると言います。「我々のような業態は売り先の確保、維持が至上命題。より良いものを求めるお客様に対し、会社として、品質の高いものを安定してお届けできるようにしていかなければいけません」。今後の規模拡大も視野に、持続的な発展を図るべく、エフワイアグリの取組みはさらなる進化を続けていきます。

メーカーメッセージ

株式会社クボタ
収穫機技術部　SVチーム
藤田 祐貴 さん

4条同時収穫で効率化・省人化を実現

ほうれんそう収穫機はバッテリと電気モータによる電動で排ガスが無く、静かな作業ができます。
立ったまま収穫作業を行えるため身体への負担を低減することができます。
4条同時収穫で手作業と比較して4～10倍程度の高能率な作業が可能です。